

グラスミア湖の畔にて  
——ワーズワースそして王維

森瀬壽三

冬の終わりを早春とは呼べないが、湖水地方 (Lake district) の空気はそれほど厳しくはなかった。東と西を丘陵に囲まれたグラスミア湖の岸辺に立つと、夕暮れの空はまるで曇りガラスのように太陽の光を一層薄めている。ウィングミア湖ボウネスの B&B で背の高い賄いの婦人に教えられた湖畔の旅宿は、静かな湖に面して建っていた。閑散とした玄関を出て、庭先にある鋼鉄の椅子に座ると、足下まで湖の小波が寄せてくる。日はとっくの昔に山蔭に入り、薄曇りの空は鈍い紫色に変わる。ときたま背後の国道を駆け抜ける車の音のほかは、鳥たちの囀りと、かすかな風の気配だけが辺りを支配している。

ここグラスミア湖に私を導いたのは、いったい何であったか。6 日前の 2 月 20 日にケンブリッジ大学のセントジョーンズ・カレッジで昼食会に招かれ、親切なフェローの案内で中世の写本が並ぶカレッジ図書館を訪れた時、鋼鉄製の螺旋階段を昇った所にワーズワースのデスマスクがあった。その石膏像は何事か黙想しているかのように、厳しくしかし穏やかな表情で数百年の歴史の中に溶け込んでいた。

しかし、それが機縁であるとは思えない。なぜなら既にその時、数日後の旅程は決めていたからである。それでは、私がセントジョーンズ・カレッジに来たことが導いてくれたのだろうか。しかし、あのフェローに会えるまでは、ケンブリッジに滞在しながらカレッジとは何の関係も持たなかった。

ひょっとすると日本を離れる前に中国の詩人王維の『輞川集』についての原稿を書いたからだろうか。8 世紀唐代の詩人も 19 世紀英国の詩人も「田園詩人」の名を冠せられることがある。そんなことが機縁になるとは決して思えないのだが、不思議なことに、この日の昼過ぎ旅宿の受付の女性に家族からの伝言があると告げられた。早速深夜の自宅に電話すると、王維の原稿について至急に連絡をするようにとのことであった。原稿に掲げる英文のタイトルを提出していなかったのである。

王維の別荘たる輞川の別業もまた当時は湖に面していた。

臨湖亭

輕舸迎上客、悠悠湖上來。 輕舸もて上客を迎ふれば、悠悠として湖上に來たる。

當軒對樽酒、四面芙蓉開。 軒に当たりて樽酒に対すれば、四面 芙蓉開く。

私の佇むグラスミア湖の岸边には、二艘のボートが閑散期のためか裏返して置かれている。傍らに「お客様の自己責任においてお使い下さい。」という表示までである。ワーズワースの棲んだダヴ・コテージは、この旅宿が隔てる東の斜面にある。彼が詩作に日々を送った時代には、その居間から湖が見えたという。

I dipped my oars into the silent lake,

And as I rose upon the stroke my boat

Went heaving through the water like a swan —

静寂の湖面に櫂を入れ、

我が舟の舳先をもたげてひと漕ぎすると

白鳥のように水を切って進んだ。

*The prelude* の一節にかく詠じるワーズワースは、きっと幾度も湖水をボートで渡ったに違いない。ケム川の水とグラスミアの水と蓋川の水と、どこかで通底しているのであろうか。

夕闇が数刻の後に迫ってきて、鳥たちはこの日の結末に追われ始めた。ふと気づくと、今まで水面で餌を漁っていた二羽の白雁が、いつの間にか岸に上がってきている。人を恐れぬこの国の鳥たちは、私の足下までやってきて、しきりに地中の餌を探している。蹲っているのが雌で、立ったまま時に遠方を注視するのが雄だろう。

夕霧がうっすらと懸かり始めた湖面に、まるで小さな光のような点が見えた。光と見えたその白い点は非常にゆっくりと右から左へと移動してゆく。白鳥だ。一羽だけの白鳥が夕暮れの湖水を渡ってゆく。何故飛ばないのか。まだ餌を探しているのだろうか。もう辺りには明界と不連続な闇が忍び寄って来ているのに。

突然、十数羽の黒ツグミが葦の間を抜けて湖水の中央へと飛び出して行った。それに続いて仲間の鳥たちが次々と舞い上がり、先頭を追いかける。その数はやがて百羽を超えるような大群となり、湖の上で大きく輪を描いて飛翔する。水面から発生するわずかな上昇気流を捉えようとしているのだろう。右に飛んだかと思うと、また左に行き、まるでただひとつの脱出口を必死に探して駆けめぐるように飛行を繰り返す。遅れた仲間の集団がそれに加わる頃には、周りの丘陵と同じくらいの高みに達していた。一羽一羽の鳥の姿が、芥子粒のようになり、やがてそれも薄明の雲のなかに溶け入ってしまうと、かすかに聞こえていたツグミ

たちの鳴き声も消えて静寂がやってきた。

華子岡

飛鳥去不窮、連山復秋色。 飛鳥去りて窮まらず、連山また秋色。

上下華子岡、惆悵情何極。 華子岡を上下すれば、惆悵として情なんぞ極まらん。

王維は、輞川の地に若い時分から馴染んでいたのだろう。唐の都長安から南に隔たった彼の別荘には、安祿山の乱以前から、その母や妻を伴って別天地の暮らしを楽しんだものと思われる。それが、乱の後に肅宗皇帝が都に戻ると、反乱軍から官位を受けた罪で、一命は救われたものの、隠遁を一時余儀なくされた。母も妻も他界し、ひとり\_川の湖水のほとりに佇む王維には、過去への追憶と現世への諦観、そして来たるべき時への悟りとが交錯するのだろう。

私が確かなインヴィテーションも持たずに、前年の9月末英国に来てから、数ヶ月の間に四人もの先賢・知己が世を去った。この遠隔の地に詩人の足跡を訪ねて、湖水の夕暮れと対峙しているのも、いろいろな因縁がそうさせているのだとしか思えない。何故、中国ではなくて英国へ来たのか、何故セントジョーンズ・カレッジのフェローを頼って来たのか、何故その時に王維の原稿を抱えていたのか。

朝から訪ねたダヴ・コテージでは、居間の暖炉に石炭の火が赤々と燃えていた。やさしい管理人の男性は、棚に飾られた一輪挿の水仙を指さしながら、私に向かって「Daffodil !」と囁いた。

They flash upon that inward eye

Which is the bliss of solitude;

And then my heart with pleasure fills,

And dances with the daffodils.

彼女たちが心の目に映る、

孤独の法悦に。

そのとき私の心は喜びに充ち、

そして水仙たちと踊るのだ。

ここの水仙はまだなのか。管理人の男に尋ねると、彼はにこやかに私を戸外にいざなった。入口の近くの庭にいくつかの水仙が芽を出し、やがて花も咲きそうだ。「リバプールの丘では随分咲いていたのだが。」と言うと、男は「この辺りではあと二週間だね。」と答える。写

真で見ると明るい居間も、当時のまま昼間は窓から入る陽の光だけの室内は薄暗く、寒さの厳しかった昔、水仙こそが女神のように、春の訪れを告げたのだろうか。

### 辛夷塙

木末芙蓉花、山中發紅萼。 木末の芙蓉花、山中に紅萼を發す。

澗戸寂無人、紛紛開且落。 澗戸 寂として人無く、紛紛として開き且つ落つ。

王維にとって、山中に咲く紅の辛夷（こぶし）の花は、あたかも浄土に咲く蓮華（芙蓉）のように見えたのであろう。

深林人不知、明月來相照。 深林 人知らず、明月 来たりて相ひ照らす。

有名な「竹里館」の後に置かれたこの「辛夷塙」は、詩人の法悦の境地をさながらに比喩しているのだろう。

六ヶ月という、長くもない旅路の果てに辿りついたグラスミア湖の岸边には、さまざまな想念が駆けめぐる。やがて立ち戻る喧噪の世界が自分にとって本当の世界なのか、それとも湖畔で垣間見た静寂と寂寞の世界こそ本当の世界であるのかと。

(2003年3月22日稿)

